

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.30)

「それぞれの土地にその土地の風習(3)」

・・・3賢人の日に思う・・・

多くの国民がカトリック教徒であるメキシコでは、年に何回かある、宗教絡みの行事にかける情熱は相当強い。とくにクリスマスを中心としたその関連の行事は、日頃の生活状況によって過ごし方の濃淡はあるだろうが、飾りつけ、贈り物、友人・知人の接待や、料理などと何時になく出費が重なるだろうし、クリスマス・ストレス症候群と呼んでもいいような、苦悩に悩まされそうな人も出てくるのではなかろうかと想像してしまう。

それにもめげず、少しでも華やかに祝おうとするのが、メキシコ人のメキシコ人たるゆえんだらう。

いろいろな人と付き合いの輪が広がると、これらの諸行事に対して、「私はキリスト教徒ではないから、関係ありません」と、斜に構えた態度では過ごせず、本報告前2回にわたって、クリスマスから年末年始にわたる行事を紹介したように、不肖ボラッチョ・ボニート氏も少なからずかかわりを持つことになる。

1月6日は、「**Día de Reyes Magos**」(ディア デ レイエス マゴス、東方三賢人の日・イエス誕生を祝いに、東方の3賢人が贈り物を持って行ったことによるという、新約聖書の故事に由来する)という日で、メキシコの親は、この日は子どもに玩具をプレゼントしなくてはならない日だという。

クリスマスのプレゼントは、洋服、文房具など何でも良いのに対し、このときのプレゼントは玩具と決まっているようである。さらに、Rosca(ロスカ)と呼ばれるパウンドケーキを食べる。

これは、直径1メートルくらいの楕円形の輪の形のものから、30センチメートルくらいのもので、大きさは様々で、砂糖で煮た果物で周囲が飾られており、この時期、パン屋さんの店先には、箱入りのロスカが山積みされ、それこそ1月早々に入ると、このロスカの箱を手にする人々が通りを行き交う。

このロスカを切り分けた断片の何箇所かに、エル・ニーニョ(赤ちゃんキリスト)の形をした、小さなプラスチックの人形が入っており、自分の分にその人形が入っていたら、2月2日の、「**Día de candelaria**」(ろうそく祝別の日を伴う聖母マリアの潔めの祝日)の日に、トウモロコシの粉、鶏肉、チーズなどの具で作ったものを、バナナやトウモロコシの皮で包んで蒸したチマキ風の、タマーレスを人々におごることになっている。

祝日の名は、ある社の西和辞書から引いた言葉を、そのまま書いたものの、申し訳ないが日本語の意味からして、門外漢の私に



残念ながら写真をとりそこなったので、インターネットから借用した

「ちょっと休憩」

・・・新聞記事より・・・

メキシコ市で3日、長さ720メートル、重さ12トンの世界最大のパン、「Rosca de Reyes」が中央広場(ソカロ)に集まった25万人に配られた。



は分からない。

ISOなどを日頃教えているものだから、つい事実の証拠を確認したいという本能的癖と、少しばかりの好奇心と、年寄りのしつこさがあわせて出てしまい、周りの女子社員たちに、キリストのお祭りと、メキシコのいわば固有の食べ物のタマーレスの、因果関係とは何ぞやなどという、高尚かつ哲学的？質問を發してしまい、彼女らを切りきり舞いさせてしまったのである。

結果はあまり分かりませんでしたという、当たり前の結論である。そうして、本シリーズ第1回で報告した、クリスマスの飾り付けのナシメントを、この日に正式には片付けるのだという。これで、長かったクリスマス・シーズンの一連の行事がやっと終わるのである。

ボラッチョ・ボニート氏の配属先でも、人事担当主催の元、社員にこのロスカのケーキがふりまわれ、参加した社員たちは、中の人形のある無しに一喜一憂していた。こんな他愛のないことに、心底から共有できる彼ら・彼女らの心に、少しばかりうらやましさを感じてしまう。

(ボラッチョ・ボニート氏の独り言・・・招待されるのは、仲間として認識されていると思うと嬉しいが、それにしても女子社員が多いせいか、誕生会といい、甘いケーキ類に付き合わされる度合いが多い)・・・閑話休題・・・

シリーズ3回の報告を書きながら、その都度胸に少しばかり引っかかる、ある現実がある。通勤途上での朝早くから交差点で、何らかのパフォーマンスを行って、車の人たちから何がしかのお金を貰おうとしている、幾組かの親子たち。

最近の寒さに震え、毛布の中から顔と手だけを出して物乞いをしている、幼い子どもを抱えた母親など。彼女、彼らを毎日見るにつけ、急ぎ足でその場を離れようとする私の頭の中に、これらの子どもたちは、色々の行事に少しでも、プレゼントをもらえたのだろうかという思いが募る。宗教上の神話の世界ばかりではなく、現代にも何処からともなく賢人が現れ、これらの子どもたちに何かプレゼントを与えられないのだろうか。私自身としては、事の良し悪しの賛否両論はあるだろうが、彼らに時おり、幾らかの小金を渡すくらいしか策がなく、殆ど何も出来ない無力感が漂う。

メキシコには世界第3位の大金持ちがいる、経済的にもかなりの力を有している実態と、一方では華やかなパーティの陰に隠れた、これらが現実に起きている事象との乖離、「旦那さん～、お恵みください」というか細い声の残響が、胸に重くのしかかってくるのであった。

(2010年1月13日)



3賢人の日に、風船に夢を託して飛ばす子ども達・・・新聞記事より